

かお・人・interview

2019年11月6日

新所長
 インタビュー


国土交通省 九州地方整備局
 筑後川河川事務所 所長

松木洋忠氏

hirotada MATSUKI

筑後川河川事務所の直轄管理河川は、九州最大の筑後川と福岡県内第3位の矢部川だ。生活や文化を支えるふたつの川の維持管理に加え、県の代わりに国が代行する、赤谷川の権限代行工事は注目度が高い。水理模型で複雑な川の流れを検証するなど、周辺住民はもとより、全国から期待されている。他に、地域と連携し特徴を活かした川づくりなど現在取り組んでいる事業や課題について新任の松木所長に話を伺う。

Q 所長就任にあたっての抱負

筑後川河川事務所は100年近い歴史があります。明治時代から、河道をショートカットにしたり、堤防などの治水構造物を作ったり、その時々で一番いいと考える河川管理を長い間行ってきました。

この九州最大の河川を預かる事務所に赴任するにあたり、さらなる100年を意識して維持管理に努めていきたいと思います。近年の度重なる豪雨に対して、どう被害を最小限にとどめるか。超過洪水対策を、新たな視点で行う機会を得たと考えています。



▲2008年の矢部川・船小屋のガタガタ橋

まずは維持管理について、不安定になりやすい水の対応、通常時の施設の点検、補修、改良が基本であり、これを充実させるような事務所の運営を心がけます。

大雨豪雨の被災地への復旧も重要です。維持管理を徹底していても、施設で防ぐことが難しい災害は起こっています。まずは、施設機能の回復と改善の集中。直轄管理の花月川、権限代行の赤谷川ともに、通常の維持管理が可能な状態に、一日でも早く戻せるよう推し進めてまいります。

Q 九州や福岡県とのかかわり

祖父が大分県に流れる松木川周辺の出身でした。自身も北九州生まれですので、久留米に赴任する以前から、福岡や大分の河川や土木の撮影に出かけていました。筑後川も矢部川も馴染みがある土地です。着任する前と後では、現場の見方が違ってきますし、これまでは意識しなかった場所も多く、新鮮に感じています。



九州最大の河川、筑後川は 千年川（ちとせがわ）とも言われています。 河川の長期的なメンテナンスに関しては、 千年とは言わないまでも100年先を 意識していきたいと思えます。

川づくりには、沖縄、高知、福岡、兵庫と様々な場所で関わり、JICA 専門家としてラオスとベトナムの海外経験もあります。

本省では道路について学びましたので、河川と道路、海外で得た経験は、日本で河川、道路の現場を見るときに大事な資産になっています。

Q ラオスでの経験

ラオス、ベトナムでは、河川の流水で土が運搬される河岸浸食が深刻な問題でした。その対策として提案したのが、川が土を置いていく仕掛けを作ること。川の力を利用した設計は現地で調達できる材料、施工能力をどう活かすかが課題でした。

写真：松木洋志



▲建設中の水制群（2002年）



▲植生が覆う（2010年）

材料の石を手に入れるため、花崗岩の山探しから始めました。予算や工期の制限は厳しかったのですが、幸いにも人力と運搬用の車はあります。そのような状況下でお手本にしたのが、高知県にある仁淀川の水制工です。日本の伝統的な川づくりの工法を分析して、仁淀川のコピーをラオスに再現しました。10年後の今は、石積みの上に土が運ばれ森が生まれ期待以上の変化です。現在は、勾配などの技術に応用したものが400基あると聞いています。

Q 当事務所の紹介(事業内容、組織、特徴)

筑後川の最所の改修計画は、流域にある重要港湾であった若津港へ航路を確保することでした。デ・レーケ導流堤を含む改修計画は明治20年(1887年)に立案されています。その後、明治22年(1889年)の大洪

水を受けて、治水対策のための改修計画が始まりました。筑後川河川事務所は、大正12年(1923年)に内務省筑後川改修事務所として設立されました。また、矢部川については、昭和45年(1970年)から当事務所が管理しています。

筑後川河川事務所は、令和3年には100年目を迎えます。これを機に、河川

改修だけでなく、流域の歴史を振り返り、地域の方々と共有するような記念事業を行いたいと考えています

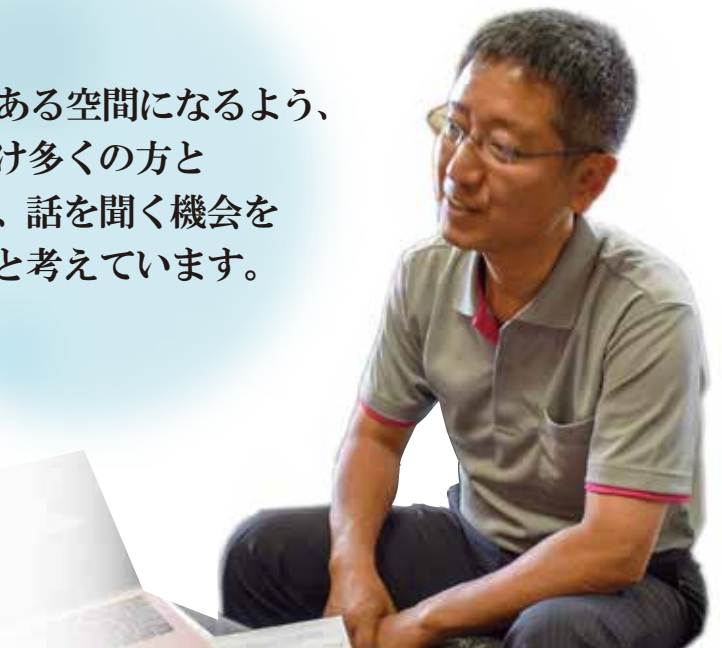
Q 今年度の事業概要

令和元年度の筑後川河川事務所の予算は約225億円です。このうち筑後川と矢部川の河川改修等の予算は令和元年度では約131億円。下流の高潮対策事業や中流部、城原川、巨勢川、隈上川の河川改修などを進めていきます。



▲今も残るデ・レーケ堤の構造

川が魅力ある空間になるよう、
できるだけ多くの方と
触れ合い、話を聞く機会を
作りたいと考えています。





▲赤谷川被災直後（東林田地区）



▲応急復旧状況

また、平成29年に大きな災害を被った赤谷川の復旧予算は約93億円です。河川災害復旧事業と緊急砂防事業を進めています。

赤谷川の直轄代行事業は全国で初めてのことです。

復旧事業を工期内に終わらせて、地元及び福岡県にお返しするのが役目です。今後についても予防防災、維持管理も重視する必要があります。

Q 地域との連携・協働について

筑後川には河川協力団体が5つあり、そのどれもが水辺の環境調査、体験など積極的に活動しています。その取り組みはどれもすばらしく、取り組みを応援させていただいています。特に産学官が一体となって取り組んでいる筑後川流域連携倶楽部には、以前から関心を抱いていました。



▲魚を探すこーら川キッズ探検隊

筑後川流域を生活・自然と分けるのではなく、共存していく考え方でさまざまな活動を行っています。それが「筑後川まるごと博物館」です。

地域連携を深めるネットワークの充実、大学で公開講座や独自の学芸員を養成し、流域のスペシャリストを育成しています。その幅広い活動には頭が下がります。情報を発信しながら、地域の活性化を川づくりから後押しする、この屋根のない博物館の考え方は、河川管理の在り方と同じです。活力ある地域社会のために、川が魅力ある空間になるよう、できるだけ多くの方と触れ合う機会を作りたいと考えています。

Q 地域建設業への要望・メッセージ

建設業に求められる役割は、河川の整備、維持はもとより、災害時における復旧対応など重要な役割を

担っています。地域防災は、地域に根差した建設企業の活躍なくして安心・安全な暮らしはできません。将来にわたってその役割を継続していただくため、受注機会の確保など業界が活躍できる環境整備を整えたいと考えています。

また、河川を通じた街づくりに参加できる機会を作るなど、地域の守り手である業界の方々と、今後もいろいろと意見交換しながら、よりよい関係を継続したいと思っています。

Q 趣味や健康法について

趣味は写真です。どこの地域にも、地域独特の伝統技術があり、その考え方を理解するつもりでカメラを抱えて動いていました。とくに、ラオス駐在時代はカメラは必要不可欠なアイテム。

当時はインターネットも不安定でしたので、現状を伝える記録のひとつとして現場の様子、調達が難しいものなど、河川に関係するものはすべてファインダーに収めたのを覚えています。

最近では、大分県と熊本県にまたがる下釜ダムで、雲が重なり合った幻想的な写真を撮影することができました。年賀状は自作していますので、今年はこのダムの写真も候補のひとつです。



▲霧の下釜ダム湖 写真：松木洋忠

プロフィール



出身地：福岡県北九州市出身
 生年月日：昭和42年2月26日（52歳）
 H元 年4月 建設省 北陸地方建設局
 三国川ダム工事事務所
 H2 年4月 建設省 北陸地方建設局
 道路計画第一課
 H3 年4月 沖縄総合事務局
 北部ダム事務所 計画係長

H5 年 4月 建設省 道路局 地方道課 市町村道室調査係長
 H7 年 4月 建設省 四国地方建設局 高知工事事務所調査課長
 H9 年 9月 JICA 専門家（ラオス公共事業省政策アドバイザー）
 H12 年12月 内閣府政策統括官付（科学技術政策担当）参事官補佐
 H15 年4月 国土交通省 道路局 道路環境対策室 課長補佐
 H17 年4月 国土交通省 九州地方整備局 遠賀川河川事務所長
 H19 年10月 国土交通省 九州地方整備局 河川調査官
 H21 年4月 国際建設技術協会 研究第二部長
 H23 年4月 国土交通省 近畿地方整備局 姫路河川国道事務所長
 H25 年8月 JICA 専門家（ベトナムの災害に強い地域づくりプロジェクト）
 H28 年6月 国土交通省 水管理・国土保全局 河川計画課 国際室長
 R元 年 7月～九州地方整備局 筑後川河川事務所長（現職）